店舗及び道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

大　槻　古　墳　群

―― 遺構確認調査報告書 ――

令和５年12月

郡　山　市　教　育　委　員　会

序　　文

郡山市は、福島県のほぼ中央に位置し、豊かな自然に恵まれ、その地理的特徴から、原始・古代より交通の結節点として東西南北から、さまざまな地域の文化が集まり、それらを礎として多様な文化が形成されてきました。

文化財は、地域の歴史や文化を理解する上で欠くことのできないものであり、地域文化の向上・発展の基礎となるものであります。その中でも、埋蔵文化財は文字の無い時代や文献資料の少ない地域の歴史や文化を解明するための貴重な資料です。

郡山市教育委員会では、本市の歴史や文化を解明する貴重な財産である埋蔵文化財を後世に遺し、継承していくことが現代に生きる私たちの大きな責務であるとの認識のもと、埋蔵文化財の保存と活用に努めているところであります。

この度調査を実施した確認調査必要地区の大槻前畑地区には、昭和13年に当時残存していた古墳の分布を記録した「大槻村古墳墳丘分布圖」により、多くの古墳が点在していることが知られていましたが、正確な位置の把握はできていませんでした。今回の試掘調査並びに遺跡確認調査により古墳の周溝が複数確認できたことから、分布図に示されたように古墳群が点在していたことが確認できました。現在、住宅が立ち並ぶ等開発が進んでしまった地区ではありますが、今後も確認調査必要地区での調査を進めて現存している範囲を確認してまいります。

本書は、発掘調査の成果を周知し、活用できるように後世に残す記録としてまとめたものであります。今後、地域の歴史解明の基礎資料や研究資料として、広く皆様に活用していただきますとともに、埋蔵文化財の保存と活用について御理解をなお一層深めていただければ幸いに存じます。

結びに、発掘調査実施から報告書作成にあたり、御尽力を賜りました関係各位の皆様に敬意を表しますとともに、心から感謝を申し上げ序文といたします。

令和５年12月

福島県郡山市教育委員会
教育長　小　野　義　明

調　査　要　項

遺　跡　名	大槻古墳群（おおつきこふんぐん）
所　在　地	福島県郡山市大槻町字新池下
発掘調査面積	1,800㎡
発掘調査期間	令和４年10月13日～令和４年12月28日
契 約 期 間	発掘調査：令和４年10月12日～令和５年２月28日
	整理報告：令和５年６月13日～令和５年12月22日
調査委託者	郡山市（市長　品川萬里）
調査主体者	郡山市教育委員会（教育長　小野義明）
調査担当者	発掘調査：公益財団法人郡山市文化・学び振興公社（代表理事　山本晃史）
	整理報告：公益財団法人郡山市文化・学び振興公社（代表理事　浜津佳秀）
事　務　局	郡山市文化スポーツ部文化振興課文化財保護係（係長　濱田暁子）
調　査　員	発掘調査：日下政勝
	整理報告：垣内和孝
補　助　員	発掘調査：安藤未希
	整理報告：安藤未希・今泉淳子

例　　言

１．本書は、福島県郡山市大槻町に所在する大槻古墳群の記録保存を目的とした発掘調査の報告書である。

２．費用の負担は、発掘調査は郡山市、整理報告は郡山市と国庫補助による。

３．本書は、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センターが編集し、郡山市教育委員会が発行した。

４．本書の執筆は、１を郡山市文化スポーツ部文化振興課文化財保護係の荒木麻衣、２～６を垣内和孝が行なった。

５．挿図の作成は、安藤未希・今泉淳子・宇佐見栄子・垣内和孝・日下政勝が行なった。

６．遺構写真は日下政勝、遺物写真は垣内和孝が撮影し、空中写真撮影は日本特殊撮影株式会社に業務委託した。

７．本書第１図は、基図として国土地理院発行1/25,000地形図「郡山西部」を使用した。

８．本書第４図は、基図として1/2,500県中都市計画図を使用した。

９．座標値は、世界測地系平面直角座標第Ⅸ系を使用した。

10．調査に関わる記録・資料および出土遺物は郡山市教育委員会の保管である。

目　　次

序　　文

調査要項

例　　言

目　　次

１．調査に至る経緯…… 1

２．調査の経過と方法…… 1

３．概要と環境…… 2

４．遺　　構…… 7

５．遺　　物…… 13

６．ま と め…… 16

参考文献…… 18

写真図版

報告書抄録

１．調査に至る経緯

確認調査必要地区の大槻前畑地区内で開発の計画の相談があり、令和４年８月 17 日から 29 日に対象となる開発区域 10,846.51㎡に、トレンチを 33 本設定し、調査面積 822.9㎡の試掘調査を実施した。

調査の結果、現表土面から 20㎝から 140㎝の深さで周溝や土坑、溝、ピットを検出し、弥生土器片や土師器片が出土した。そのため、遺構・遺物が確認された範囲の 6,100㎡を要保存範囲と判断した。

その後、埋蔵文化財包蔵地外の遺構・遺物の検出であったため、埋蔵文化財の新規発見に伴う詳細な調査が必要であることから現状保存が困難である範囲 1,800㎡を発掘調査することとした。

これを受けて、遺跡確認調査業務を令和４年 10 月 12 日付けで、原稿作成業務を令和５年６月 13 日付けで郡山市と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社との間で委託契約が締結された。

２．調査の経過と方法

発掘調査の対象となったのは、要保存範囲のうち、店舗となる部分と道路の敷地の 1,800㎡である。このうち前者は、要保存範囲内の東側、同じく後者は西側に位置する。開発者の都合により、両者を同時に発掘調査することができず、東側の店舗部分の調査を先行して実施し、その終了後に西側の住宅地道路部分の調査を行なった。本報告では、前者を東区、後者を西区とした。

発掘調査業務に着手したのは令和４年 10 月 13 日である。同日から 20 日にかけて、重機で東区の表土を除去し、この間の 19 日から作業員を導入して本格的な発掘調査作業を開始した。遺構検出および掘り込みは、鋤簾・移植箆などを併用して行なった。遺構図は縮尺 20 分の１で作成し、写真は 35㎜カラーリバーサルフィルムでの撮影とデジタルカメラを併用した。調査で使用した座標値は、世界測地系平面直角座標第Ⅸ系である。11 月８日には、ドローンを使って東区の空中写真撮影を行なった。東区の作業が終了したのは翌９日である。

西区の作業に着手したのは 11 月 14 日である。同日から 21 日にかけて重機を用いて表土を除去し、その終了後から 28 日まで東区の埋め戻しを行なった。これと並行して、東区と同様の方法で西区の発掘調査作業を進めた。12 月 21 日には、西区の空中写真撮影を行なった。西区の作業が終了したのは翌 22 日である。その後、同日より 28 日まで、重機で西区の埋め戻しを行なった。

基本土層は、東区・西区ともに、以下のように設定した。遺構の検出面は、地山であるＬⅣの上面である。

ＬⅠ：盛土・表土

ＬⅡ：暗灰色土（粘性・しまりやや強い、サクサクしている）

ＬⅢ：黒～黒褐色土（粘性弱い、しまりやや弱い）

ＬⅣ：黄色土（ローム～粘土質）

整理報告は、翌令和５年度に行なった。遺物は原則として原寸で実測し、写真撮影はデジタルカメラを使用した。報告書の校正・印刷を除く作業が終了したのは、令和５年 10 月 20 日である。

３．概要と環境

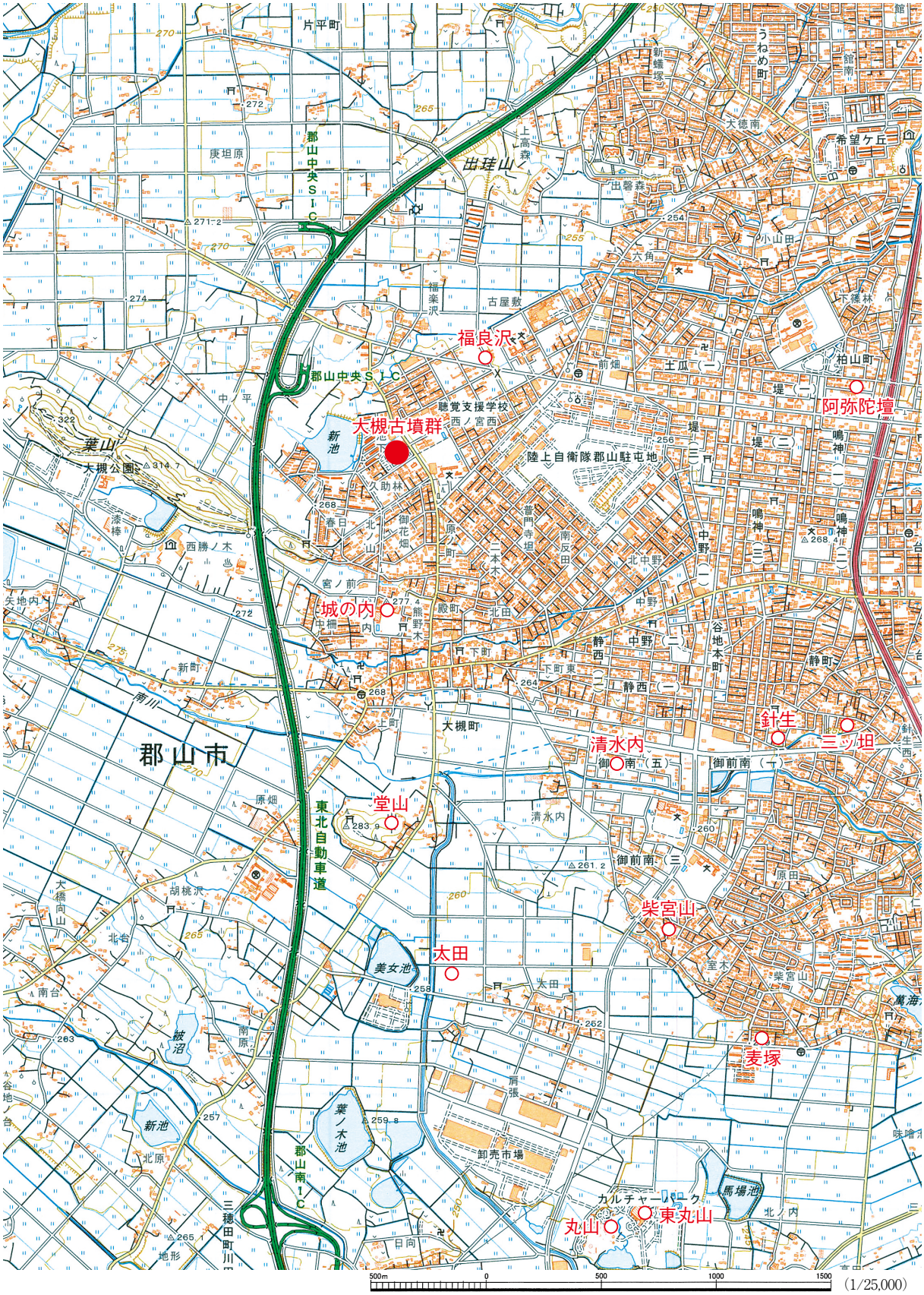
福島県郡山市の中心市街地西側に位置する同市大槻町は、阿武隈川の支流である逢瀬川と笹原川に挟まれた台地上に広がる。町域および周辺には多くの遺跡が存在し、なかでも古墳時代遺跡の密度が高いことで知られている。大槻古墳群もその１つだが、早くに墳丘が失われたため、周知の遺跡としては登録されていなかった。しかし、昭和戦前期に作成された記録などでその存在は広く知られており、おおよその位置は把握されていた（梅宮 1975）。

今回実施した発掘調査では、その一部を構成する古墳の周溝が７基みつかり、古墳群の確かな位置を把握することができた。全体的に大きく削平されて遺存状態が悪く、土坑とした遺構のうちの１基は、古墳周溝の残欠の可能性がある。古墳の周溝から出土した土器は、いずれも奈良時代前半の特徴を持つ。ただし、それらの土器は底面より浮いた層位から出土しており、古墳の築造時期を直接示すものではない。古墳の築造から一定期間が経過した後の祭祀や追葬などといった行為に伴うとみられる。よって古墳の築造時期は、古墳時代の終末期に遡ると考えられる。

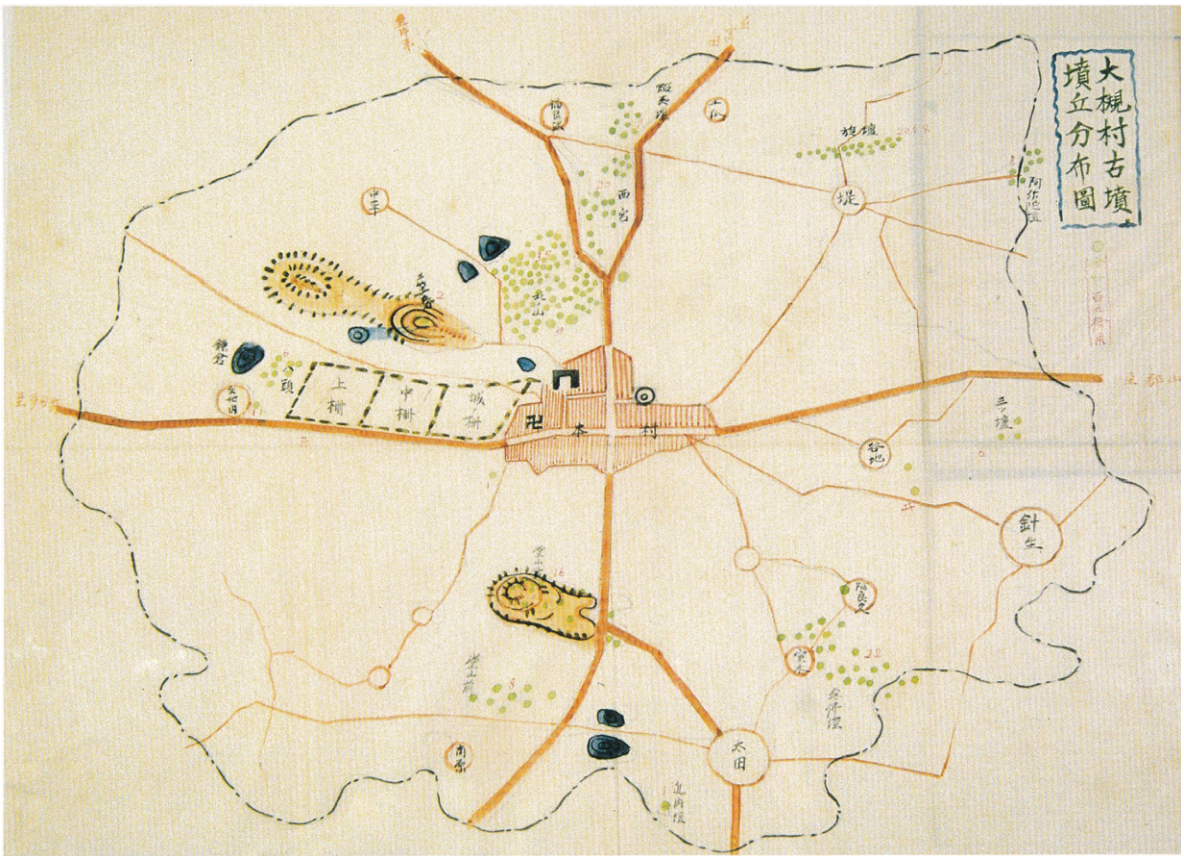
前述の記録によれば、今回の調査区の場所は、73基の古墳が集中する「北ノ山壇」の北東端付近である。その北東には20基の古墳からなる「西宮壇」、そのさらに北東には９基の「蝦夷壇」が存在したらしい（垣内 1994）。これら３者を別の古墳群と捉えるか、同一古墳群中の別の支群とするかは、全体像が判然としない現状では悩ましい問題である。どちらの場合にしても、多数の古墳が群集するあり方は、終末期の群集墳の属性として評価できるであろう。本報告書では、「北ノ山壇」「西宮壇」「蝦夷壇」を併せて大槻古墳群とする。

1969 年に実施した福良沢遺跡の発掘調査では、「蝦夷壇」を構成するとみられる古墳が２基みつかった。１号墳は径 10 ｍほどの円墳で、墳丘は完全に削平されていたが、周溝および横穴式石室の側壁の一部が確認できた。周溝および羨道からは鉄鏃と柄頭、周溝からは土師器の坏が出土した。２号墳は周溝の一部を確認したのみで、その周溝からは土師器の坏と甕が出土した。出土した土師器の特徴から、２基の古墳とも終末期の築造と考えられる。また、遺構外からではあるが、古墳時代前期の土師器の器台や高坏が出土しており、前期の遺構の存在が予想できる（須藤 1971）。

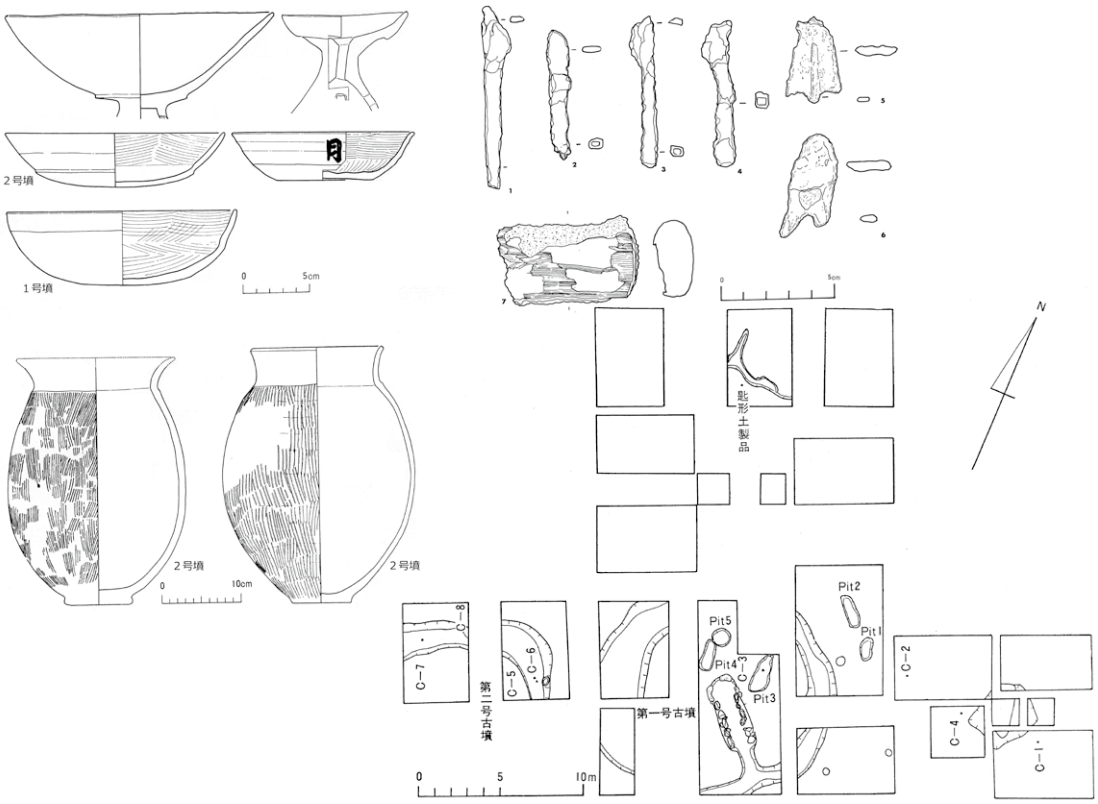
次に、周辺の古墳時代遺跡の概要を紹介することで、大槻古墳群をとりまく環境を略述する。前期に遡る古墳に三ツ坦古墳群があり、２基の方墳を発掘調査した（郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1984）。大槻町の域外だが、笹原川北岸に広がる低地内の微高地上に所在する東丸山遺跡の発掘調査では、前期の方形周溝と中～後期の円形周溝が複数みつかった。これらは、墳丘の削平された方墳や円墳である。そのほかに、前～中期の土坑墓群や前期と後期の竪穴建物群もある（郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1987）。西側に隣接する丸山遺跡においても、後期の竪穴建物群などがみつかった（郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1988）。隣接する両遺跡の竪穴建物群は、一連の集落を構成すると評価できる。両遺跡の北西にやや離れた太田遺跡でも後期の竪穴建物群が発掘調査でみつかっており（田中 1974）、後期の集落が広い範囲に拡散したことがうかがえる。阿弥陀壇古墳群では、中期前半の築造とみられる一辺約 25 ｍの方墳が発掘調査された。この阿弥陀壇１号墳の周りには、後～終末期の円墳群や土坑墓群が造営されており、大型の方墳を始祖墓とした墓域を形成する（佐藤・高松 1979）。大槻古墳群の南に隣接する



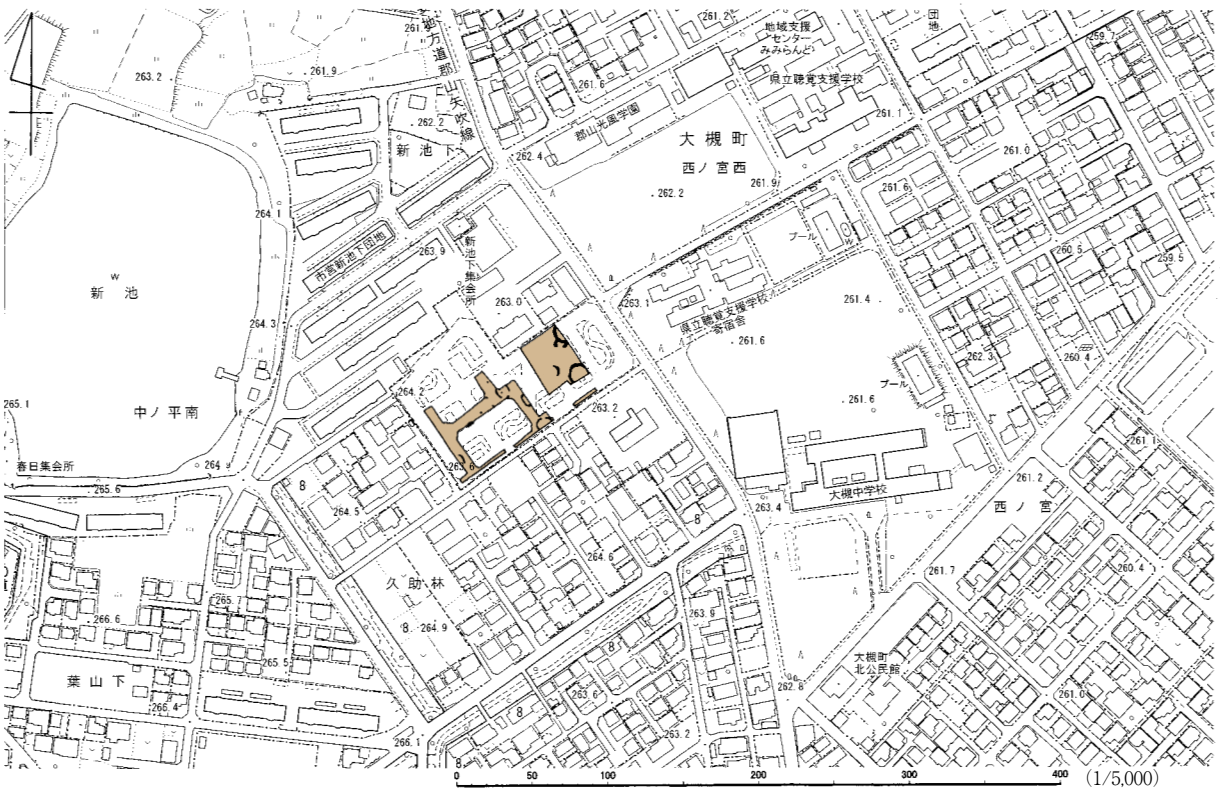
第１図　大槻古墳群と主要古墳時代遺跡の位置



第２図　「大槻村古墳墳丘分布図」（個人蔵、垣内 1994 より転載）



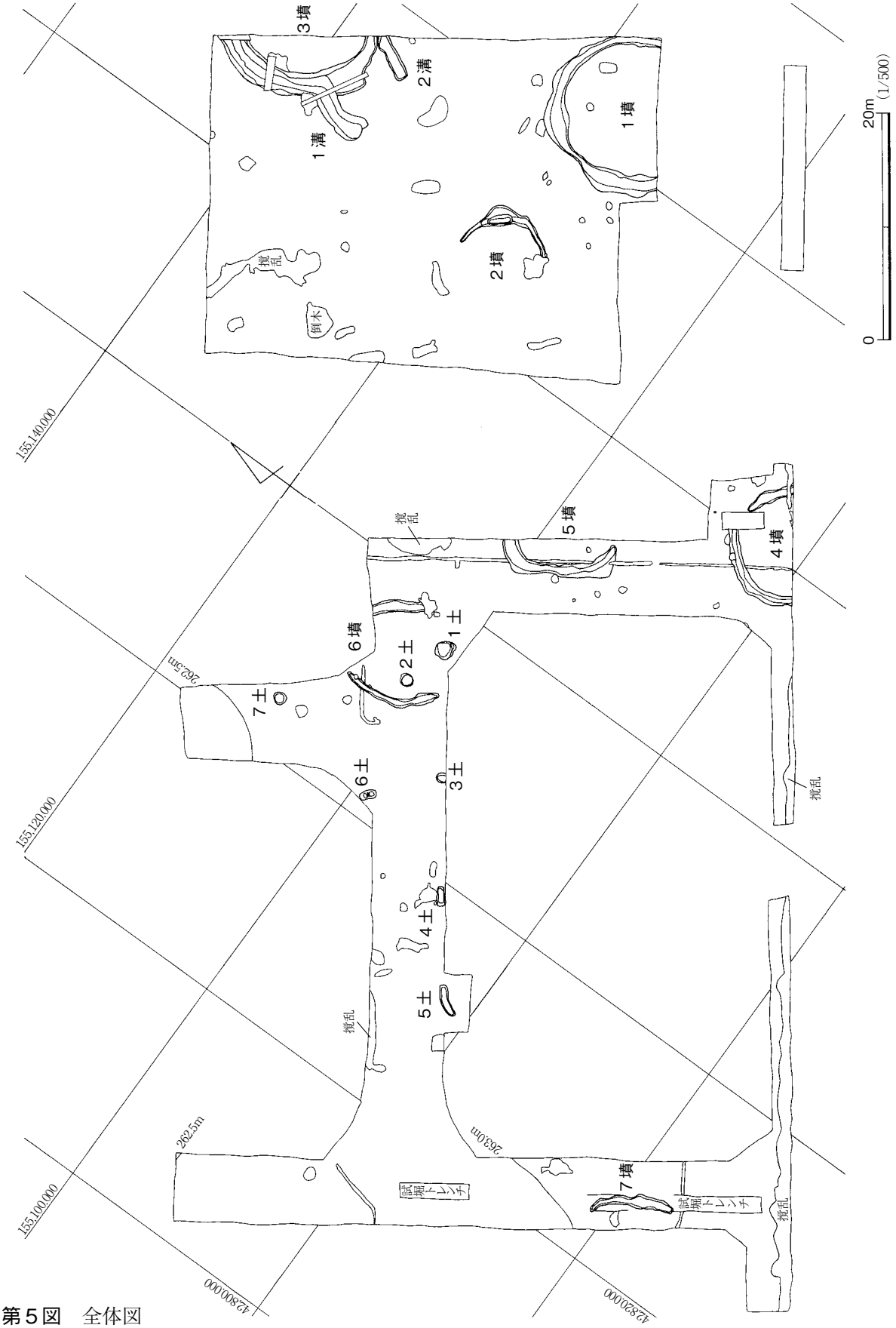
第３図　福良沢遺跡と出土遺物（須藤 1971 より一部改変・転載）



第４図　発掘調査区の位置

城の内遺跡（大槻城跡）の発掘調査では、中期と後期の竪穴建物がみつかるとともに、前期の土師器が一定量出土した（高松 1983、郡山市文化・学び振興公社 2023）。中期のなかに一時的な空白期がありそうだが、古墳時代を通じて継続した拠点的な集落であったと予想できる。中期の前半を中心に、大規模な集落を形成したのが清水内遺跡である。複数回に及ぶ発掘調査で、106 棟の竪穴建物や祭祀場とみられる方形区画などがみつかり、渡来系の要素が色濃く認められた（郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1999）。周辺に広がる平地の開発拠点として、諸集団が結集して営んだ集落と考えられる。同遺跡の東には針生古墳や既述の三ツ坦古墳群、南には柴宮山古墳群が近接する。針生古墳は墳丘が現存するが、後世の改変が著しく墳形が判然としない。柴宮山古墳群は大半が失われるものの、西端付近とみられる場所に円形基調の墳丘が１基残る（垣内 2019）。柴宮山古墳群が展開したとみられる範囲の南東端付近には、円筒埴輪や形象埴輪の出土した後期の麦塚古墳がある。部分的な発掘調査のため不確定だが、全長 26.8 ｍの前方後円墳のようである（梅宮 1962）。埋葬施設は比較的大きな石材を使用しているようだが、詳細は不明である。麦塚古墳の埋葬施設が横穴式石室であれば、当地域における出現期の事例となる。各種の埴輪を樹立していることから、地域を代表する古墳と評価できる。そのほか、明治期に作成された記録には、旧大槻村の中心集落周辺に、複数の後～終末期古墳が存在したことをうかがわせる記事がある（梅宮 1962）。また、堂山と呼ばれる小丘陵上には９基の円形基調の墳丘が現存する。

既述した昭和戦前期の記録にみられる「北ノ山壇」の 73 基、「西宮壇」の 20 基、「蝦夷壇」の９基という数値が正しければ、大槻古墳群の総数は 102 基となる。他の古墳群と比べ突出した規模であり、その特異性がうかがえる。同様な属性を持つとみられる古墳群として、阿武隈川を挟んだ対岸に、71 基の小円墳から構成される蒲倉古墳群がある（郡山市文化・学び振興公社 2009）。


3墳
2溝
1溝
1墳
2墳
撹乱
倒木
0
20m
(1/500)
155,140,000
撹乱
5墳
4墳
6墳
1土
2土
7土
6土
3土
262.5m
155,120,000
撹乱
4土
5土
撹乱
262.5m
263.0m
7墳
試掘トレンチ
試掘トレンチ
撹乱
155,100,000
42,800,000
42,820,000

第５図　全体図

４．遺　　構

古墳７基、溝２条、土坑７基を確認した。以下では、遺構の種類ごとに内容を報告する。なお、本報告で古墳とした遺構は、発掘調査時は周溝として調査を進めている。また、１～２号溝とした遺構は３号墳（周溝）と密接に関わると判断したので、本報告ではそれらを一連の遺構として報告する。

１号墳　東区で確認した円墳である。南東の一部は調査区外になる。墳丘は完全に削平され、埋葬施設も失われている。周溝の深さは一定ではなく、西部分が浅い。そのため西部分の溝幅が狭くなっている部分がある。規模は、周溝下端の内寸で径が約 12 ｍである。

２号墳　東区で確認した円墳である。全体が調査区内にあるものの削平が著しく、北東部分の周溝がいびつな円弧状に残存するのみである。周溝の深さは一定ではなく、一部が方形基調の平面形で深くなる。この部分は、形状から周溝内埋葬の可能性があるものの判然としない。規模は、残存する周溝下端から復元した数値で、周溝下端の内寸で径が約８ｍとなる。

３号墳・１～２号溝　東区で確認した。北東部分の多くが調査区外である。１基の円墳と２条の溝の重複として調査しているが、１号溝とした遺構の多くが３号墳周溝と同じ位置で重複しており、１号溝が３号墳の墳丘を意識して掘削されたのは明らかである。ただし、１号溝の南部分は３号墳周溝の円弧から離れて屈曲する。２号溝は、この１号溝の直線部分とほぼ平行し、両溝は関連する可能性が高い。以上の状況から、円墳であった３号墳の築造から一定の期間が経過した後に、溝で方形基調に区画した空間を、墳丘の南側に付設する改修を施したと想定できる。３号墳の規模は、調査区内で確認した周溝下端から復元した数値で、円墳部分の周溝内寸の径が約 11.5 ｍとなる。

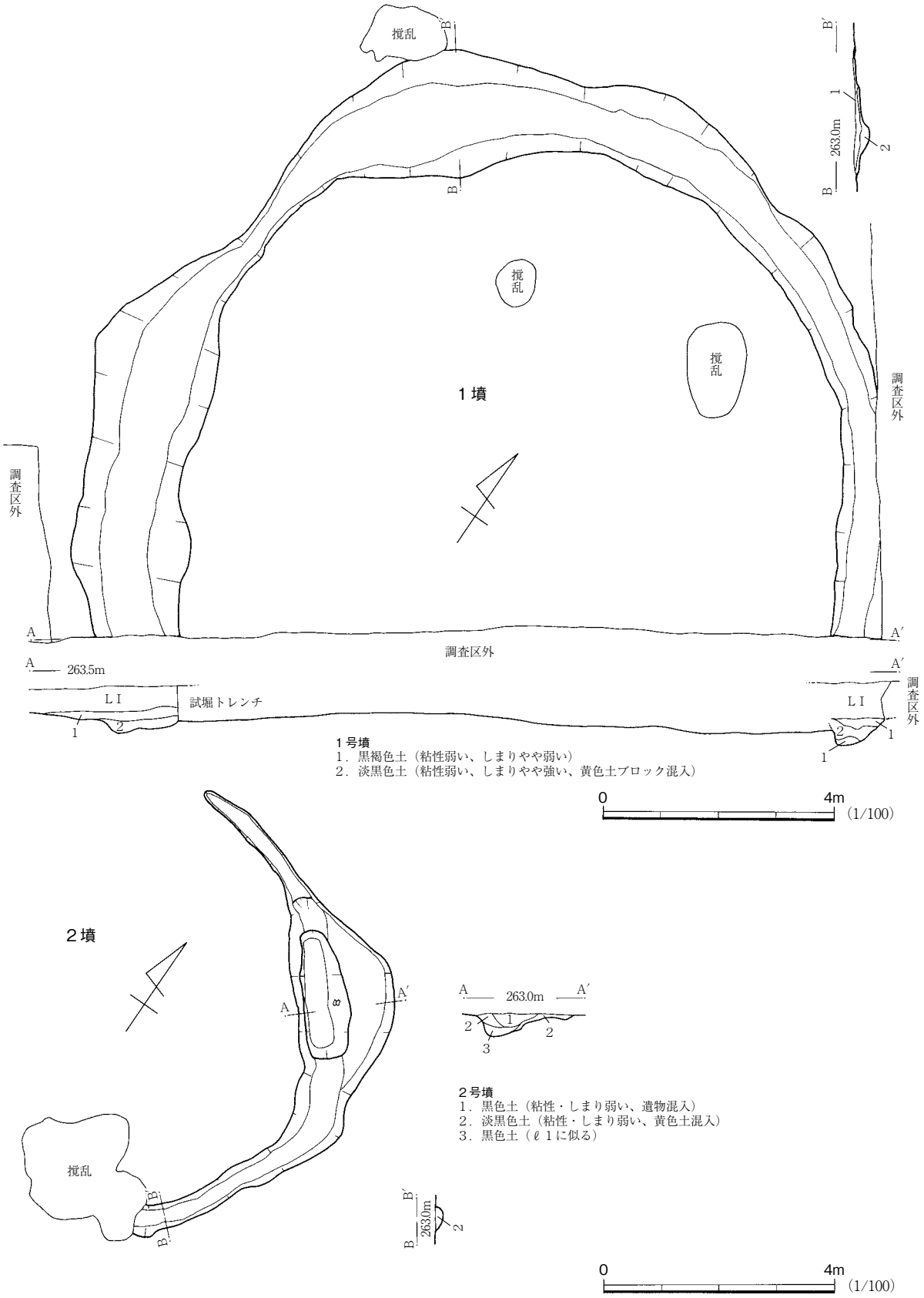
４号墳　西区で確認した円墳である。南東部分の多くが調査区外である。墳丘は完全に削平され、埋葬施設も失われている。周溝の深さは一定ではなく、北部分が浅くなり、現状では途切れる部分がある。規模は、周溝下端の内寸で径が約９ｍである。

５号墳　西区で確認した円墳である。北東部分の多くが調査区外である。墳丘は完全に削平され、埋葬施設も失われている。周溝の深さは一定ではなく、南東部分が浅くなり、現状では途切れる。南西部分の周溝平面は一部直線的だが、全体的には円弧を描く。いびつな平面形である上に確認した周溝が限られるため、確かな規模は判然としないが、径 10 ｍ前後であろう。

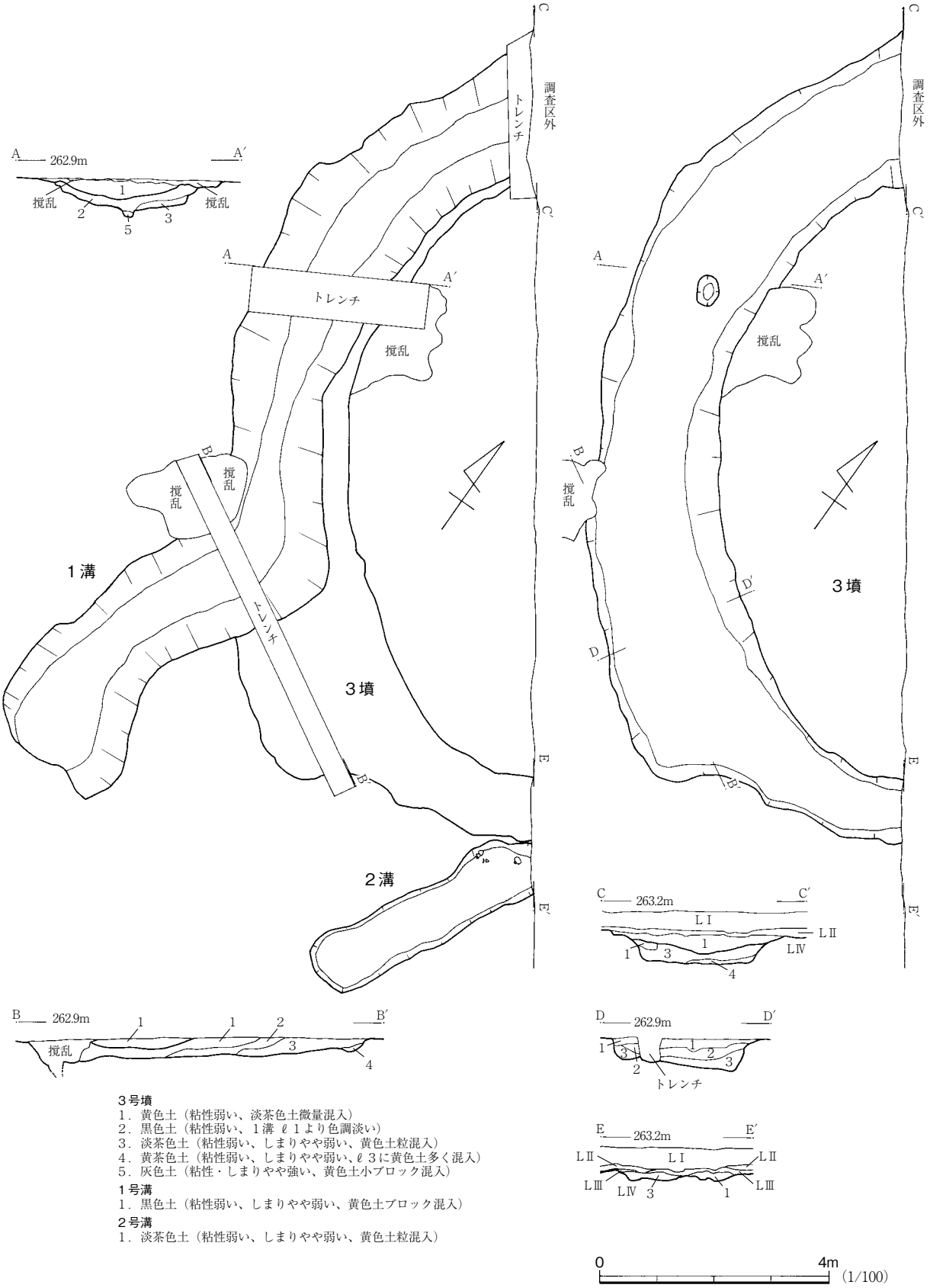
６号墳　西区で確認した円墳である。北部分の一部が調査区外である。墳丘は完全に削平され、埋葬施設も失われている。周溝の遺存状態も悪い。周溝の深さは一定ではなく、現状では南東部分が存在しない。ややつぶれた円形を呈するため正確な規模を測定し難いものの、径８ｍ前後であろう。

７号墳　西区で確認した円墳である。遺存状態は極めて悪く、北東部分の周溝底面付近のみが残存する。ただし、先立って実施した試掘調査において、対応する南西側の周溝を確認している。確かな規模は捉えられないが、径８ｍ前後であろう。

１～７号土坑　西区で７基確認した。このうち５号は、平面が円弧状となる。今回確認した古墳の周溝は、大半が深さの一定しない形状である。この点を踏まえると、５号は古墳周溝の残欠の可能性がある。２号と７号は平面が円形基調で、しっかりと掘り込まれている。１号・４号・６号は形状がいびつであり、３号は部分的な確認の上に深さがごく浅い。


撹乱
B
B′
1
2
263.0m
撹乱
撹乱
1墳
調査区外
調査区外
A
A′
調査区外
A
263.5m
A′
LI
試堀トレンチ
1
2
LI
2
1
1
1号墳
1．黒褐色土（粘性弱い、しまりやや弱い）
2．淡黒色土（粘性弱い、しまりやや強い、黄色土ブロック混入）
0
4m
(1/100)
2墳
A
A′
263.0m
1
2
2
3
2号墳
1．黒色土（粘性・しまり弱い、遺物混入）
2．淡黒色土（粘性・しまり弱い、黄色土混入）
3．黒色土（ℓ1に似る）
撹乱
B
B′
263.0m
2
0
4m
(1/100)

第６図　１～２号墳

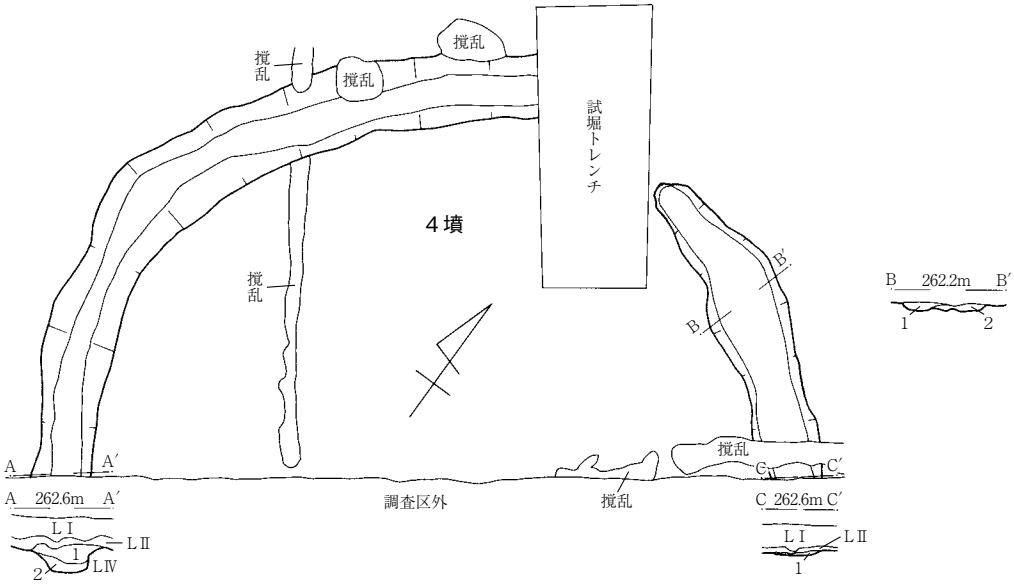


3号墳
1．黄色土（粘性弱い、淡茶色土微量混入）
2．黒色土（粘性弱い、1溝 ℓ 1より色調淡い）
3．淡茶色土（粘性弱い、しまりやや弱い、黄色土粒混入）
4．黄茶色土（粘性弱い、しまりやや弱い、ℓ 3に黄色土多く混入）
5．灰色土（粘性・しまりやや強い、黄色土小ブロック混入）

1号溝
1．黒色土（粘性弱い、しまりやや弱い、黄色土ブロック混入）

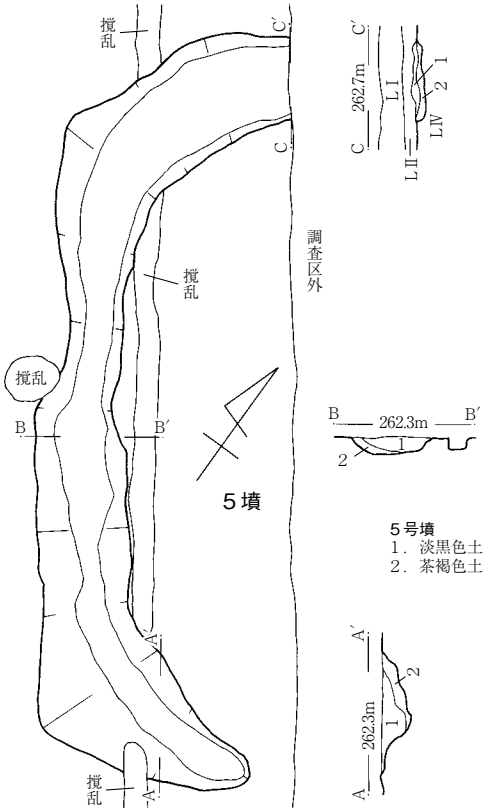
2号溝
1．淡茶色土（粘性弱い、しまりやや弱い、黄色土粒混入）

第7図　3号墳・1～2号溝



4号墳
1．黒色土（粘性弱い、サクサクしている）
2．茶褐色土（粘性弱い、しまりやや弱い、黄色土小ブロック混入）

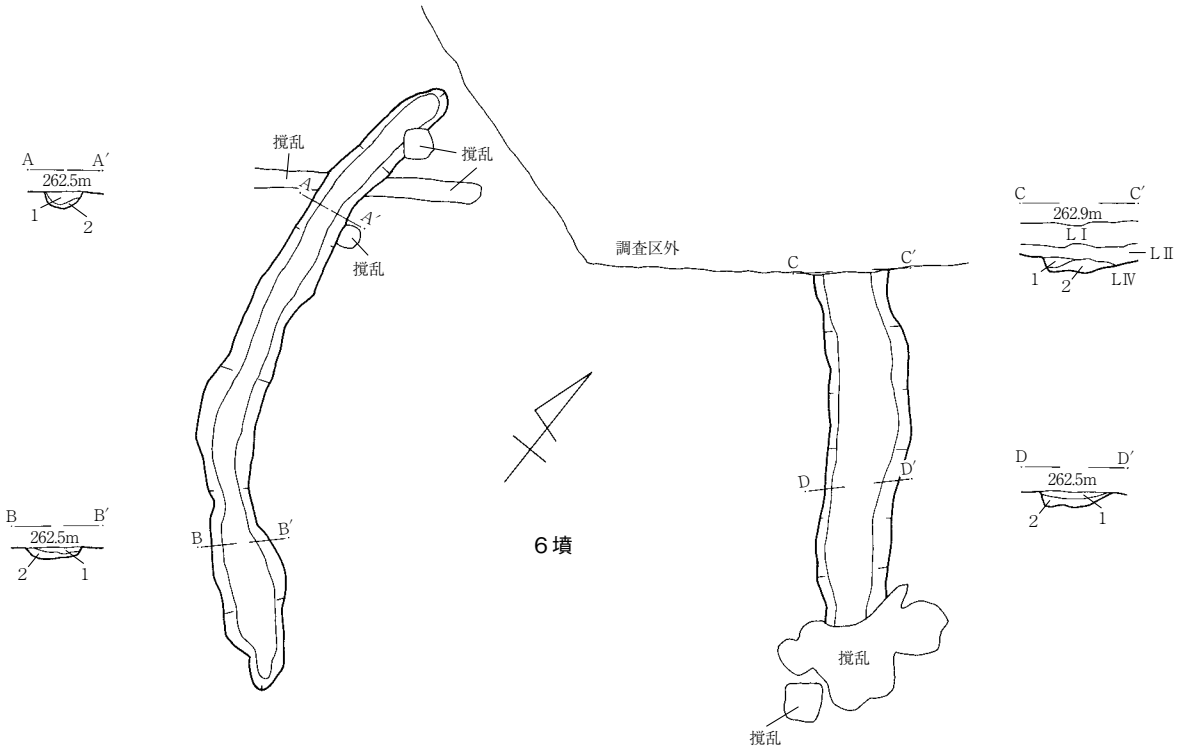
0 4m (1/100)



5号墳
1．淡黒色土（粘性弱い、しまりやや強い、サクサクしている、炭化物粒含む）
2．茶褐色土（粘性やや弱い、黄色土ブロック混入）

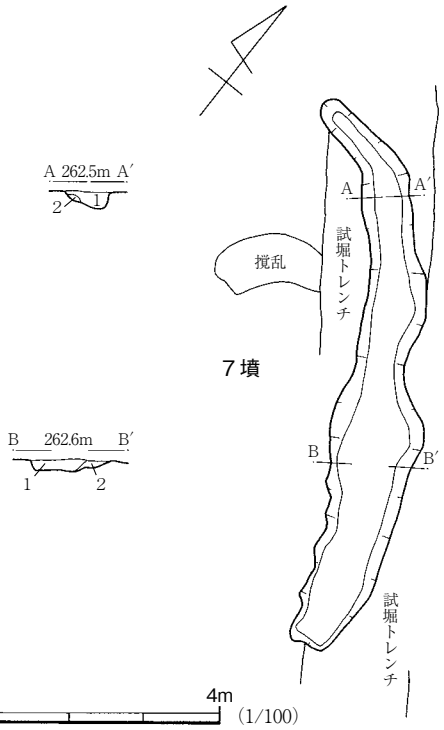
0 4m (1/100)

第8図　4～5号墳



6号墳
1．黒色土（粘性弱い、サクサクしている）
2．茶褐色土（粘性弱い、しまりやや弱い、黄色土ブロック混入）

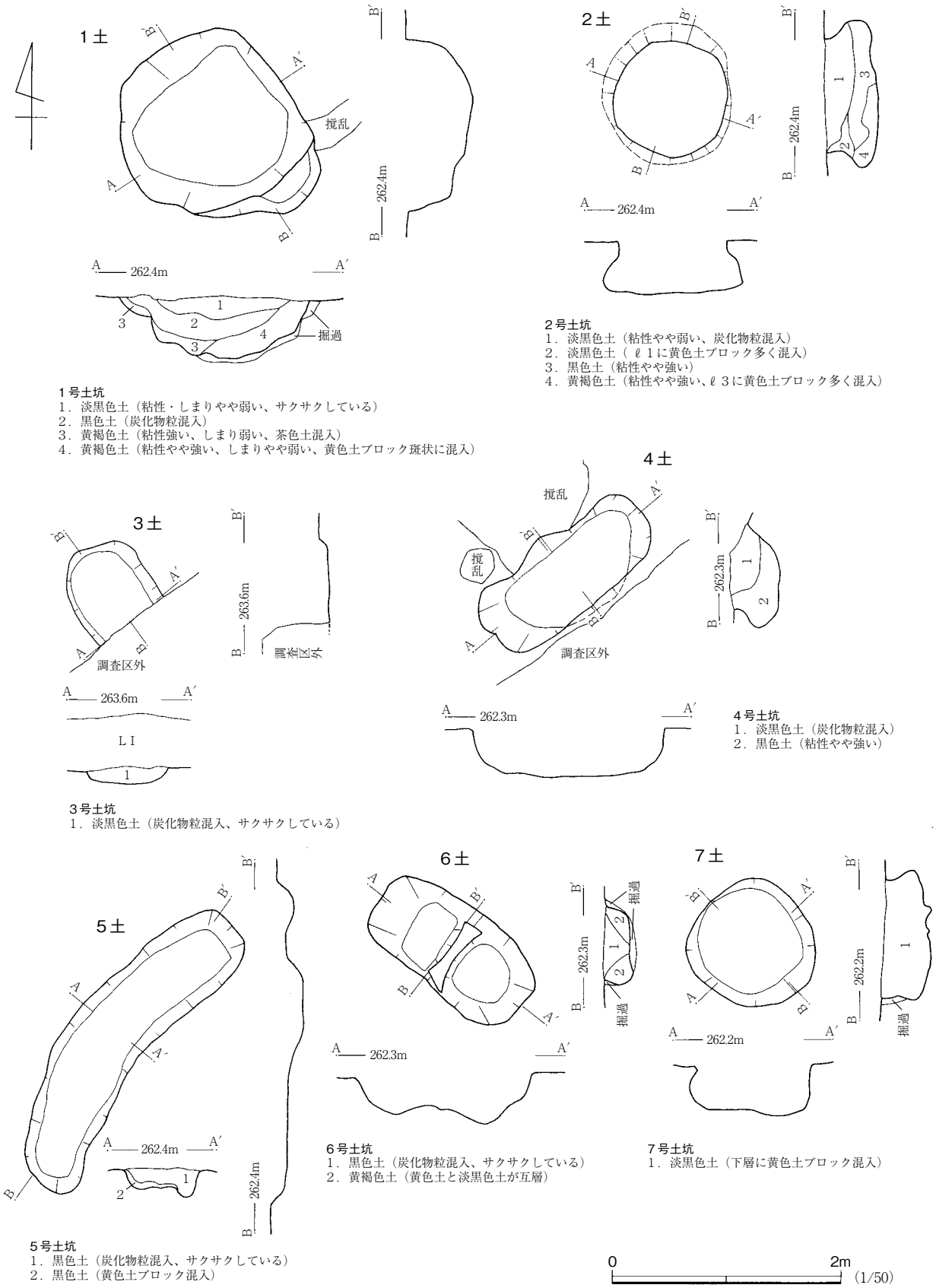
0　4m　(1/100)



7号墳
1．黒色土（粘性弱い、サクサクしている）
2．暗黄褐色土（粘性・しまりやや弱い、黄色土ブロック多く混入）

0　4m　(1/100)

第９図　６～７号墳



1号土坑
1．淡黒色土（粘性・しまりやや弱い、サクサクしている）
2．黒色土（炭化物粒混入）
3．黄褐色土（粘性強い、しまり弱い、茶色土混入）
4．黄褐色土（粘性やや強い、しまりやや弱い、黄色土ブロック斑状に混入）

2号土坑
1．淡黒色土（粘性やや弱い、炭化物粒混入）
2．淡黒色土（ℓ1に黄色土ブロック多く混入）
3．黒色土（粘性やや強い）
4．黄褐色土（粘性やや強い、ℓ3に黄色土ブロック多く混入）

3号土坑
1．淡黒色土（炭化物粒混入、サクサクしている）

4号土坑
1．淡黒色土（炭化物粒混入）
2．黒色土（粘性やや強い）

5号土坑
1．黒色土（炭化物粒混入、サクサクしている）
2．黒色土（黄色土ブロック混入）

6号土坑
1．黒色土（炭化物粒混入、サクサクしている）
2．黄褐色土（黄色土と淡黒色土が互層）

7号土坑
1．淡黒色土（下層に黄色土ブロック混入）

0　2m　(1/50)

第10図　土坑

５．遺　　物

出土した遺物の大半は土師器・須恵器といった古代の土器である。その数量は少なかったものの、復元率の高い個体が多い。第 11 図と第 12 図に、実測した 18 点を示した。以下ではその概要を報告する。古墳出土の遺物は、いずれも周溝堆積土からの出土である。

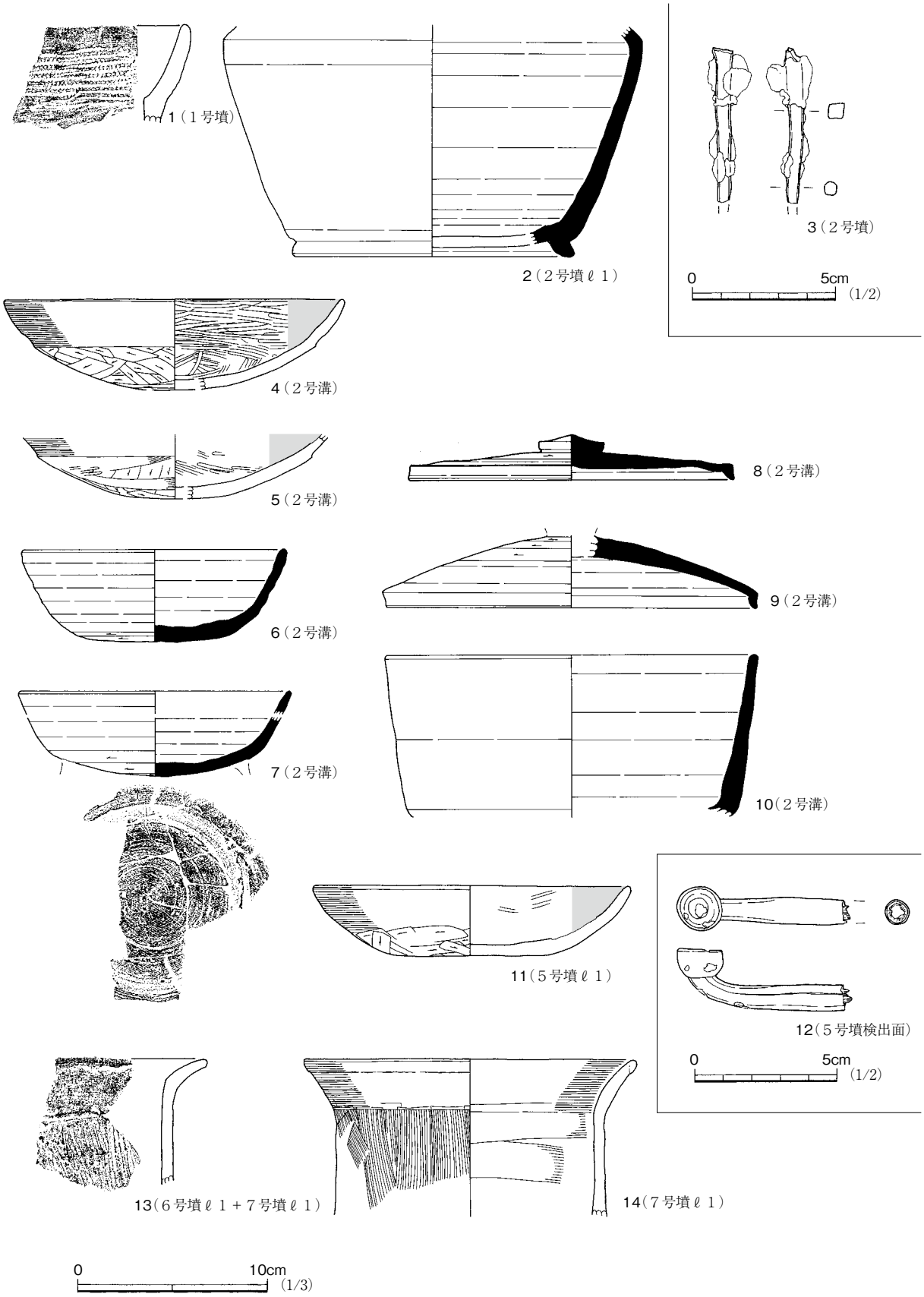
１号墳　１とした弥生土器が周溝堆積土から出土した。受口となる口縁部の破片である。外面に横方向の撚糸文が施され、内面の受口に伴う稜線は明瞭である。

２号墳　２・３の２点を図示した。いずれも周溝堆積土からの出土である。２の須恵器は瓶類の体部から底部の破片である。外面肩部に明瞭な稜線を形成し、肩上部には自然釉が認められる。外面は平滑に仕上げられ、体部のロクロ目は明瞭ではない。出土層位は周溝の底面より浮いた状態で、ℓ１からの出土である。３は断面が方形の棒状の鉄製品であるが、どのような製品かは不明である。太さは均一ではない。細い方の先端が欠損する。太い方の先端は、一方向から潰すようにして先端を尖らせているように見受けられるが、銹膨れがあり判然としない。

２号溝　４～10の７点を図示した。２号溝そのものの深さがごく浅いこともあり、いずれも底面に近い層位からの出土である。４の土師器坏は丸底で、口縁部と体部の境の外面に弱い段があり、この段に対応する部分の内面がわずかにくびれる。外面の口縁部はヨコナデ、同じく体部から底部はヘラケズリ、内面はヘラミガキと黒色処理が施される。５の土師器坏は丸底で、口縁部と体部の境の外面に弱い段がある。外面の口縁部はヨコナデ、同じく体部から底部はヘラケズリとヘラナデ、内面はヘラミガキと黒色処理が施される。６の須恵器坏は平底であるが、外面の体部下端と底部との境界は丸みを帯びる。内外面ともにロクロ目が明瞭に認められる。外面の底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリされている。７は須恵器高台付坏で、高台部は剥離し失われている。底部は丸底である。内外面ともにロクロ目が明瞭に認められ、外面の底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリされている。８の須恵器蓋は、偏平なプロポーションで器高が低い。内外面ともにロクロ目が明瞭に認められ、外面頂部が回転ヘラケズリされている。外面に自然釉が認められる。９の須恵器蓋は器高が高く、山形のプロポーションとなる。摘部は失われている。内外面ともにロクロ目が明瞭に認められ、外面の頂部は回転ヘラケズリされている。10は須恵器鉢の破片である。内面には明瞭なロクロ目が認められるが、外面は平滑に仕上げられており、ロクロ目は不明瞭である。

５号墳　11・12の２点を図示した。11の土師器坏は平底風に仕上げられているが、ロクロは使用していない。外面の口縁部はヨコナデ、同じく体部から底部はヘラケズリ、内面はヘラミガキと黒色処理が施される。出土層位は周溝の底面より浮いた状態で、ℓ１からの出土である。12は銅製の煙管鴈首である。腐食により一部が欠損し、全面に緑青銹が認められる。鴈首内には、竹製とみられる羅宇の端部が残る。

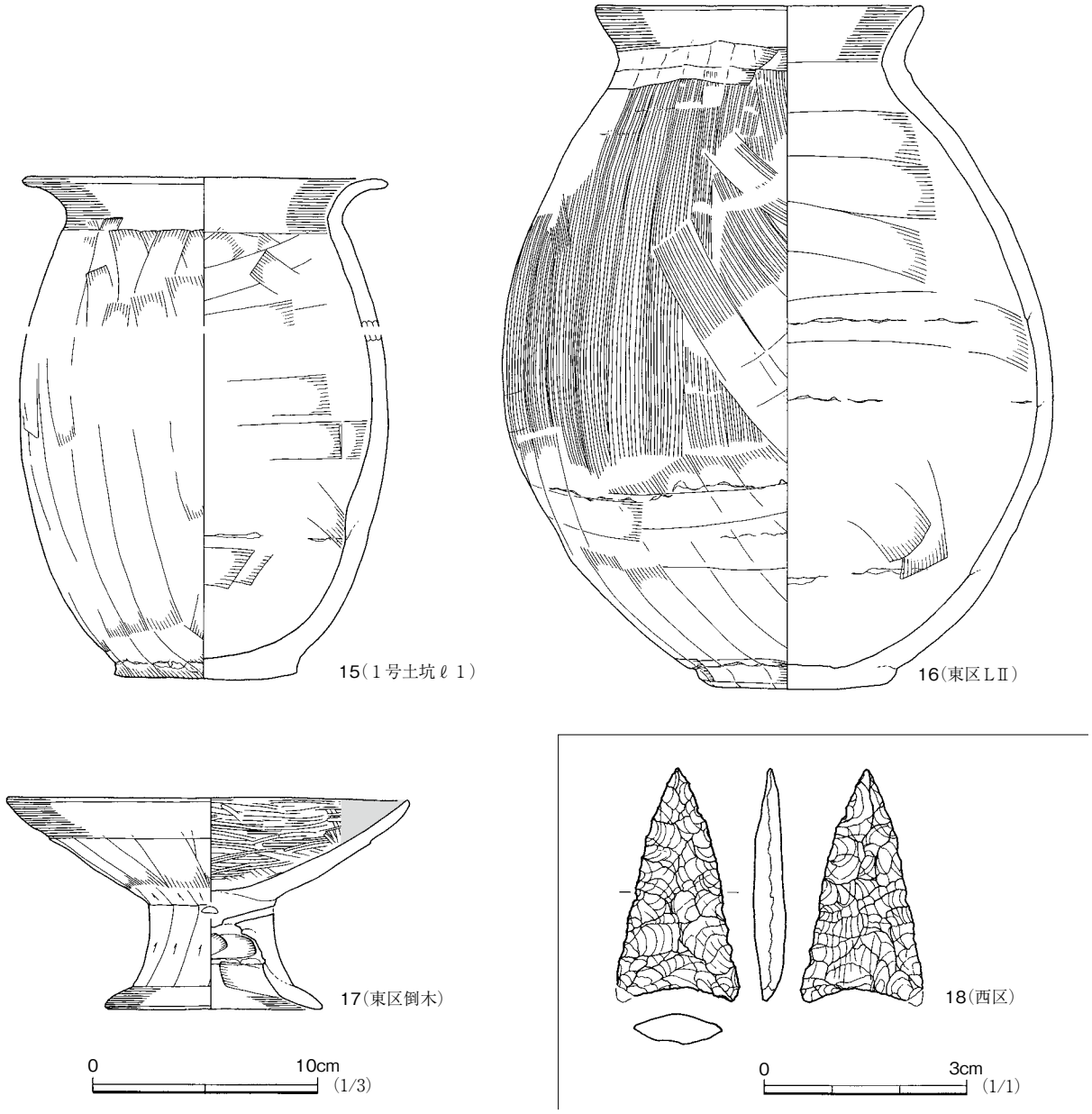
６号墳・７号墳　13・14 の２点を図示した。13 の土師器甕は、６号墳と７号墳から出土した破片が接合した。外面の胴部に縦方向のハケメが認められる。14 の土師器甕は６号墳の周溝 ℓ１から出土した。外面の胴部に縦方向のハケメが認められる。13 と似るが、口縁部の屈曲具合が異なるため、別個体と判断した。



第11図　1～7号墳出土遺物

１号土坑　15の土師器甕を図示した。口縁部から胴部にかけての破片と、多くが残る胴部から底部の個体とは接合しないが、同一遺構の出土で調整が類似しているため同一個体と判断した。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面が縦方向のナデ、内面が横方向のナデである。

遺構外　16～18の３点を図示した。16の土師器甕は、東区北西部からの出土である。やや歪んだ器形で、口縁部と底部の中心軸が一致しない。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面の上半が弱いハケメ、下半が斜方向のナデ、内面は横方向のナデが顕著である。17の土師器高坏は、東区北西の倒木堆積土の上層より、口縁部を下にした逆位の状態で出土した。脚上部に相対するように２ヵ所の孔が穿たれている。口縁部と体部の境の外面に弱い段がある。外面の口縁部はヨコナデ、同じく体部から底部・脚部はヘラケズリ、脚端部はヨコナデ、坏部の内面はヘラミガキと黒色処理が施される。18は、頁岩製とみられる石鏃である。



第12図　土坑・遺構外出土遺物

６．まとめ

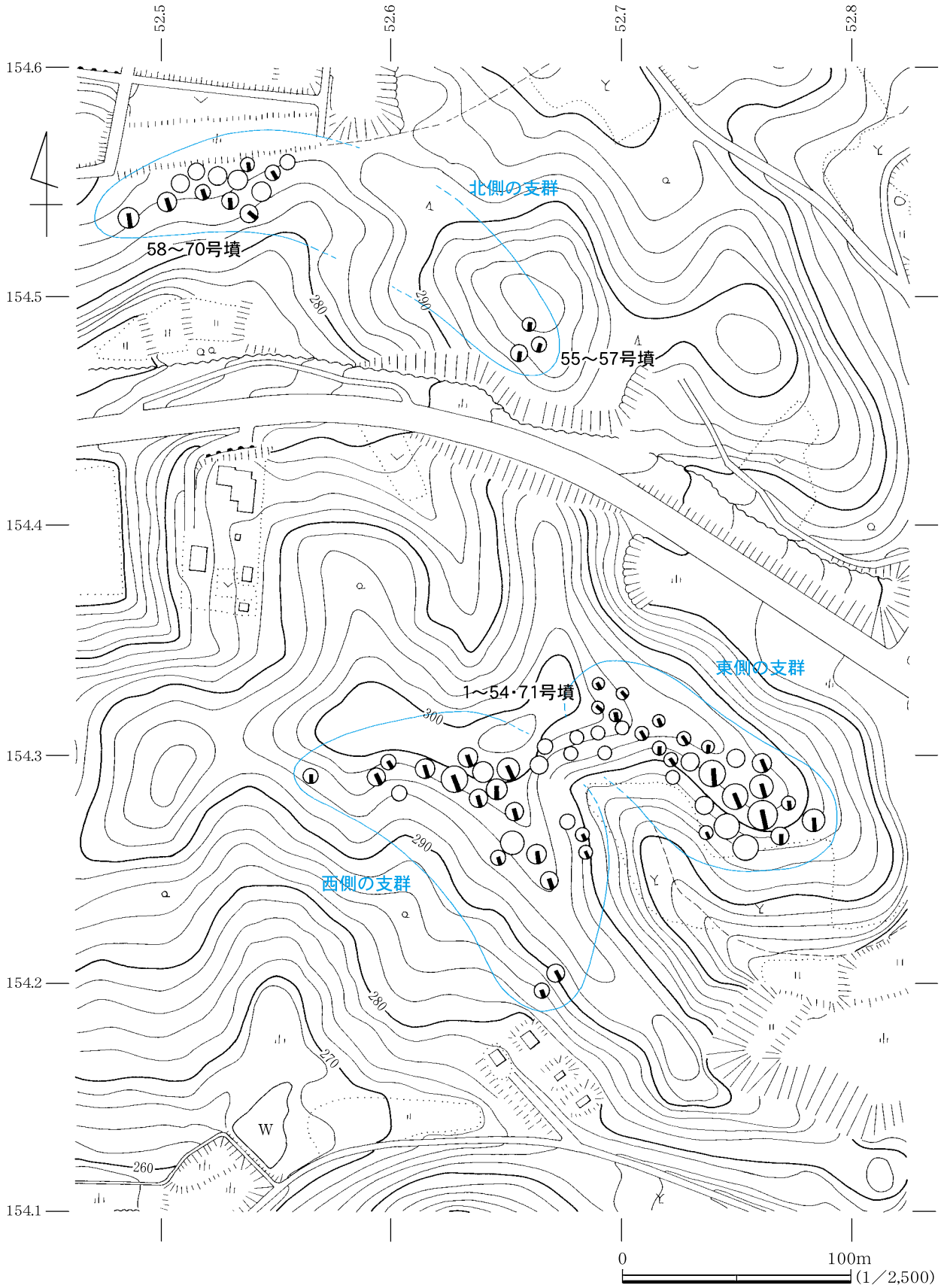
今回の発掘調査の最大の成果は、これまで確かな位置の把握できていなかった大槻町所在の大型群集墳の一部が確認できたことである。先立って実施した試掘調査では、今回の調査区の北西側に低湿地の広がることを確認しており、この方向に古墳群が広がることはない。古墳群は、今回の調査区の北東および南西から南の方向に展開したと予想できる。

確認した古墳はすべて墳丘・埋葬施設が完全に削平されており、周溝の底面付近が遺存するのみであった。周溝からは、土師器・須恵器といった土器が出土した。土器の出土量は多くなかったものの、復元率の高い個体が多い。土器はおおむね奈良時代前半の特徴を持つ。周溝出土の土器は底面より浮いた層位から出土しており、古墳の築造から一定の時間が経過してからその場所に残されたと判断できる。これらの土器は、祭祀や追葬などといった古墳築造後の行為に伴い、古墳の築造そのものは古墳時代終末期に遡ると考えられる。多数の古墳が群集するあり方は、終末期の築造をうかがわせる属性である。

確認した古墳のうち、調査区東端の１号墳と３号墳の規模が大きい。そのうち３号墳では、南に方形基調の区画を付設するような改修を加えていることが想定できた。周溝の浚渫などといった墳墓の管理、あるいは祭祀や追葬などといった行為が行なわれるなかで、区画が付設されたのではないかと考えられる。この区画を構成する溝からは、奈良時代前半の特徴を有する土器が出土しており、区画の付設時期は奈良時代前半に下る。区画を構成する２号溝は、今回の発掘調査で最も多くの土器が出土した遺構である。これらの土器も、祭祀などといった儀礼に用いられた可能性が高い。この区画は、相対的に規模の小さい２・４～７号墳が存在する南西側を向く。規模の大きい１号墳や３号墳のある東側から古墳の築造が始まり、順次西側へと造墓が移行していくなかで、この区画が設けられたのではないかと考えられる。

東区北西でみつかった倒木の堆積土上層からは、口縁部を下にした逆位の状態で、ほぼ完形な土師器の高坏（17）が出土した。付近からは、やはり復元率の高い土師器の甕（16）が出土している。全体的に大きく削平され、遺構の遺存状態が悪いなかにあって、復元率の高い土器が近接した場所から出土したのは偶然とは考え難い。祭祀などといった意図的な行為がなされたように感じられる。

同じ郡山市の阿武隈川を挟んだ対岸には、総数 71 基からなる蒲倉古墳群がある。第 13 図に示したのは、蒲倉古墳群の墳丘分布である。丘陵上に、墳丘の裾を接するように多くの古墳が群集する。同古墳群では、奈良時代前半まで追葬の行なわれたことが確認されており、周溝から出土した土器の大半はこの時期のものである。それらの土器は、大槻古墳群の場合と同じように、多くが底面から浮いた状態で出土しており、古墳群の造営が終末期に遡ることを示す。規模や造営の時期、土器の出土状況から予想できるその後の様相など、両古墳群には多くの共通点がある。異なるのは、大槻古墳群が平地に造営されたのに対し、蒲倉古墳群は丘陵上に立地するのが目立つ程度である（郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1999・2000・2001、郡山市文化・学び振興公社 2009）。共通点の多く認められる古墳群が、阿武隈川の東西両岸域に併存することは、古墳時代終末期から奈良時代前半にかけての両地域が、同様な社会・政治構造にあるとともに、大槻古墳群と蒲倉古墳群とが、歴史的な背景を共有して造営されたことを示すと思われる（垣内 2020）。



第13図　蒲倉古墳群墳丘分布（郡山市文化・学び振興公社 2009 より転載）

参考文献

梅宮茂編『福島県郡山麦塚古墳』郡山市教育委員会 1962 年

梅宮茂「古代の郡山」郡山市編『郡山市史』第 1 巻 1975 年

垣内和孝「松井綾夫著『安積郡大槻村に於ける遺跡遺物の研究』の紹介と若干の検討」『郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団研究紀要』第 1 号 1994 年

垣内和孝『郡山の古墳』歴史春秋出版 2019 年

垣内和孝「郡山の後・終末期古墳」『郡山地方史研究』第 50 集 2020 年

郡山市文化・学び振興公社編『蒲倉古墳群 第８・９次調査報告』郡山市教育委員会 2009 年

郡山市文化・学び振興公社編『大槻城跡（城の内遺跡）第４次発掘調査報告書』郡山市教育委員会 2023 年

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『三ツ坦古墳群 史跡宇津峯』郡山市教育委員会 1984 年

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『東丸山遺跡』郡山市教育委員会 1987 年

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『丸山遺跡』郡山市教育委員会 1988 年

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『清水内遺跡 ６・８・９区調査報告第１冊』郡山市教育委員会 1999 年

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『蒲倉古墳群 第５次調査報告』郡山市教育委員会 1999 年

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『蒲倉古墳群 第６次調査報告』郡山市教育委員会 2000 年

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『蒲倉古墳群 第７次調査報告』郡山市教育委員会 2001 年

佐藤千春・高松俊雄編『阿弥陀壇』郡山市教育委員会 1979 年

須藤隆編『郡山市福良沢遺跡発掘調査報告書』郡山市教育委員会 1971 年

高松俊雄編『大槻城跡Ⅰ 城の内遺跡第１次～第３次調査概報』郡山市教育委員会 1983 年

田中正能編『太田遺跡』郡山市教育委員会 1974 年

写　真　図　版

空撮

北東上空より見た西区

真上上空より見た西区

空撮

北上空より見た東区

真上上空より見た東区

1号墳

1号墳周溝断面

2号墳遺物（2）出土状況

2号墳

３号墳と１・２号溝の関係

３号墳

３号墳周溝・２号溝断面

２号溝遺物（６）出土状況

２号溝遺物（９）出土状況

4号墳

4号墳周溝断面

5号墳周溝断面・遺物（11）出土状況

5号墳

6号墳

6号墳周溝断面

7号墳周溝断面

7号墳

1号土坑

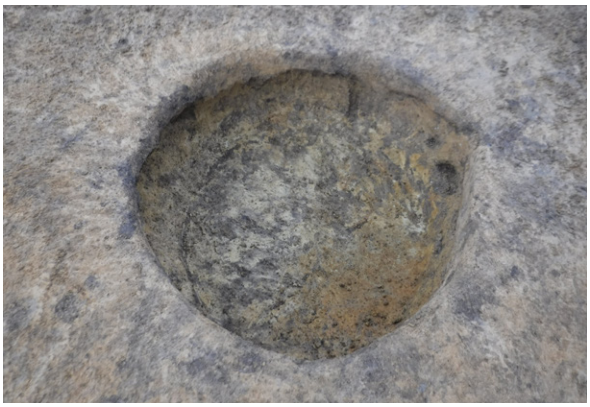
2号土坑

3号土坑

4号土坑

5号土坑

6号土坑



7号土坑

東区倒木遺物出土状況（17）

古墳・溝出土遺物（1～6）

古墳・溝出土遺物（7～14）

土坑・遺構外出土遺物（15～18）

報　告　書　抄　録

書　　名	店舗及び道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務 大槻古墳群 遺構確認調査報告書
編　著　者	垣内和孝　荒木麻衣
編 集 機 関	公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター
所　在　地	福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番
発 行 機 関	郡山市教育委員会
所　在　地	福島県郡山市朝日一丁目23番７号
発 行 年 月 日	令和５(2023)年12月22日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大槻古墳群（おおつきこふんぐん）	福島県郡山市大槻町字新池下	2036	未登録	37° 23′ 48″	140° 19′ 4″	20221013 ～ 20221228	1,800㎡	店舗建築 道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大槻古墳群（おおつきこふんぐん）	古墳	古墳時代終末期～奈良時代前半	古墳・土坑	土師器・須恵器	

要　　約	古墳時代終末期の大型群集墳を発掘調査。

店舗及び道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

大　槻　古　墳　群

――遺構確認調査報告書――

令和５(2023)年12月22日

編　集　公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
文化財調査研究センター
〒963-0541　福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番

発　行　郡山市教育委員会
〒963-8601　福島県郡山市朝日一丁目23番７号

印　刷　不二石橋印刷株式会社
〒963-0724　福島県郡山市田村町上行合字西川原9－2